〔様式1〕

令和3年度　北区立小学校学力向上を図るための全体計画

東京都北区立袋小学校

令和3年度「北区基礎・基本の定着度調査」を受けての各教科の分析	
国語	学校全体の正答率を見ると、全ての学年が全国値の平均を同等かそれを上回っているが、昨年度の校内の平均正答率を大幅に下回っている。観点別で見ると、「知識・技能」、「思考・判断・表現力」の観点では、全ての学年の平均正答率が同等かそれ以上なのに対し、「主体的な学習に取り組む態度」の平均正答率はどの学年も低い傾向にあった。昨年度はコロナ禍の影響で、以前の学習指導要領でいう「話す・聞く」の領域の単元はほとんどできない状況であった。また、話し合い活動にも制限があるため、国語科のようにコミュニケーションをとりながら問題解決することができず、児童の主体的な学習に課題がある。感染対策を講じながら、交流を深め深い学びを進めていき、単元の中で自己調整を図ることができるような児童を育てていく。
社会	学校全体（5～6年）の正答率について、5年生では全国値を上回ったが、6年生においては、平均正答率が60%と下回った。5年生は学習内容を概ね理解できており、基礎的な知識の習得や資料を読み取る力も身に付いていると言える。6年生はコロナ禍の影響もあり、国土や産業などの社会的な事象について、見学や体験など実際に肌で感じる箏が困難な状況であったことが、「知識・理解」の向上につながらず、観点別の正答率にも影響が出たと推察できる。身近な都道府県の地理や特産物など、資料を読み取りながら特徴を理解し、実際に見たり触ったりしながら「生きた学習」を通して意欲を高めていきたい。
算数	学校全体（2～6年）の正答率は全国平均をほぼ上回る結果となった。観点別で見ると「主体的に学習に取り組む態度」の項目において、すべての学年で目標値を超えているか同等であった。「知識・技能」の観点を見ると、どの学年も目標値よりも平均を超えていた。できた喜びによって児童は自信をもち、「主体的な学習に取り組む態度」の資質向上につながっていると考えられる。ただ、「思考・判断・表現」の観点を学年別に見てみると、3年生、6年生の平均正答率が目標値を下回っていた。量感や答えの見積もり、文章題を数直線で示すことなど、問題文を読んで数値をイメージすることが苦手な児童が多いことから、生活場面への置き換えや、複雑な数値から整数への変換、具体物を用いる等、児童の理解を図る工夫をしていきたい。
理科	学校全体(4～6年）の正答率は、70%近くで全国値平均とほぼ同等だったが、6年生においては正答率が60%を下回っていた。カテゴリー別の項目を見ると観点の「主体的に学習に取り組む態度」は学年が上がるにつれて目標値から数値が遠ざかっている傾向が見られた。自然事象の仮説を立証するためには、実験を行うことがカギとなる。しかしコロナ禍によって一人一人が充実した実験をすることができず、師範実験が増えた。よって「なぜ」が生まれにくく、子供たちの意欲や関心が高まりづらかったと推察できる。感染対策を講じた上で、子供たち自らが実験を行う授業を展開していくことで、児童の理解の向上につなげていきたい。

本校の教育目標

〇よく考える子

〇体をきたえる子

〇思いやりのある子

〇最後までやりぬく子

学力向上にかかわる経営方針

・北区基礎・基本の定着度調査等の結果を基にした個に応じた指導の充実
・「できる」喜びが味わえる授業改善
・GIGAスクール構想に基づく、ICT機器の活用
・授業観察による指導・助言や校内研修等のOJTの推進（きたコンの扱い方を含む）

本校が児童に育成したい力

・生きて働く「知能・技能」を習得する力
・未知の状況にも対応できる、思考、判断し、表現する力
・学びを人生や社会に生かそうとする、学びに向かう力

校内における学力向上推進体制

学力向上に関する特別委員会（研究推進委員会、学力向上・少人数推進委員会、通知表委員会、特別支援教育委員会）、分掌（授業改善推進プラン、図書館、GPO研修会【GIGA構想に係わる研修会】）、放課後補充教室（学力フォローアップ教室）等を有機的に機能させ、児童の学力向上を図る。

本校の授業改善に向けた視点

指導内容・指導方法の工夫	教育課程編成上の工夫	校内における研究や研修の工夫	評価活動の工夫	家庭や地域社会との連携の工夫
・課題解決型・探究型授業の実践 ・学習活動「振り返り」の充実 ・児童に「わかる」「できる」喜びを味わわせる授業づくり ・十分な教材研究によるねらいの明確化 ・児童が主体的に取り組む学習活動 ・授業のユニバーサルデザイン化 ・GIGAスクール構想に基づく、きたコンの積極的な活用	・授業時間確保のための学校行事の見直し ・新学習指導要領解説及び小中一貫カリキュラムに沿った内容を、さらに独自に解説を加えた「要約集」の積極的な活用 ・次年度実施に向けた、生活科・総合的な学習を中心としたカリキュラムマネジメントの完成 ・放課後補充教室（フォローアップ教室）の充実 ・個別最適化をねらった学習タイム	・ICTの活用を通して主体的に学ぶ児童の育成を目指した授業の実践 ・授業改善を図るための、教員同士の積極的な授業参観（ブロック会で事後検討） ・GPO（きたコンの使用方法・授業での活用方法などを全職員で行う研修）のサステナブルな計画の作成、及び実施	・児童の実態に即した評価規準に基づいた観点別評価の実施 ・評価規準や評価方法の工夫・改善（きたコンを利用したポートフォリオ評価の活用） ・きたコンを活用した教科横断的な学習計画の作成 ・PDCAサイクルを意識した指導と評価の一体化 ・主体的に学習に取り組む態度の「自己調整」及び「粘り強さ」の具現化	・学校ファミリーで情報交換 ・地域の教育力の活用 ・ホームページの充実と更新 ・学校便りの発行（月1回） ・80周年記念式典の準備、交流を通して学ぶ郷土愛・地域愛の育成 ・児童の変容を自身も保護者も感じる事ができるキャリアパスポートの活用

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案　（1年）

	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
国語	全体の9割が平仮名の読み書きの能力が身についているが、夏休み前の段階で未習得の児童がいる。また、全体的に短い文章でも言葉のまとまりを意識して正しく読み取ることや文章を書くと、拗音・促音、「は・へ・を」などの助詞の定着が十分ではない児童が見られるので、家庭と連携して指導を続けていく。	語彙を増やすためにしりとりやかるたなどを学習の始めに導入して、楽しみながら言葉の習得を目指す。また、読書指導を充実させ、多くの言葉に触れさせるとともに、語句の意味を正しく読み取ることができるよう指導する。また、身近な出来事について文章を書いていくことで、言葉の活用方や文法の定着を図る。	学習進度に合わせたブックコーナーの設置や読み聞かせを行うなど読書指導を充実させる。読書カードに読んだ本の記録をして読書への意欲を高める。また、日記を書くことで身近な出来事から文章にして書けるようにしていく。書いた文章を元に友達と交流し、相手に伝たわる文章が書けるように指導していく。
算数	数の大小・合成・分解などの基礎概念の理解に課題があるため、足し算引き算に時間がかかる児童がいる。また、平仮名が未習得であったり、言葉の意味を理解できていないことで文章を正しく読み取れず、問題の意味をとらえることに課題があり、演算決定することが難しい児童がいる。	ブロックなどの半具体物をつかった操作活動を多く取り入れたり、図や絵を活用したりすることで、数の基礎概念を育てる。文章題では、演算決定に必要なキーワードに線を引かせるなど、自力で演算決定するために必要な力を育てる。また、身の回りの物や事象と算数の学習を結びつけていくことで、生活に生かせるようにする。	パワーアップ講師と児童の学習の定着状況を共有しながら効果的に個別指導を行う。また、保護者と連携しながら家庭学習の中で学習の補充をしていく。算数を身近な物として感じられるように、教科の枠を超えて学習や生活のあらゆる場面との結びつきを意識させる。